

いの流水俳壇

「当季雑詠」

特選

庭椅子の余熱にもたれ螢の夜

刈谷 志津選

川村 博子

(評) 農作業に勤しむ作者は、今日の日課も終了し、ほっと一息。涼しくなった夕方に、庭椅子に腰を下ろすと、ほのかな温もりが全身を包んだ。その心地よさを「庭椅子の余熱にもたれ」と詠む。この余熱とは、電気製品等の余熱ではなく、太陽熱が椅子に反射して残した温もりである。そこで前方の闇に目をやると、水辺に光りながら飛び交う螢。螢と聞けば、団扇や箒を持って、「ほう、ほう、ほうたる来い」と呼んだ遙かな日が、昨日のように浮かぶ。特に「余熱にもたれ」の描写が見事で、平和な里にある幸福感が伝わる抜群の一句。

一巡り廻る山裾夕河鹿

片岡 包女

(評) 高齢の作者は、日課の一つであるウォーキングで、近くの山裾を一巡りして、足の鍛錬をしながら歩いている。四季の移ろい、出合いなど、すべて良き句材として作句し、俳句への情熱は未だ健在。最近暑さを避け、夕方歩くことにしている。そこで出合ったのが「河鹿」。河鹿は山の溪流などに住む小さな痩せた蛙で、雄は石の上などで「ピョロピョロヒヒヒ」と清涼な美しい声で鳴く。正岡子規の句に「河鹿鳴いて石ころ多き小川かな」がある。小川に響く河鹿の声、静けさにある山里。緑の山河に包まれた道、爽やかなウォーキングコース。これからも元気で歩かれ、末永く吟詠のほどを願う。

花南瓜高き石垣登りきる

森岡 照月

(評) 南瓜は世界各地で栽培され、代表的な野菜で、茎は地を這ったり支柱に登ったり、垣に登るものもある。揚句は、茎が花をつけながら石垣に登ったと言う。ちなみに雄花は柄が長く、葉の上に出て、鮮やかな黄色で人目につきやすい。雌花は花弁の下に子房がある。虫媒花だが、雄花は少ないため人工授粉をする着果が多くなる。早朝、起き抜けに見た南瓜の花が、大きくぱっと開いた。新鮮で明るい黄色、老眼も澄み、思わず「おはよう」と声をかけて見る。梅雨にも負けず、咲きつぐ花南瓜。下五の「登りきる」の借辞により、活力と壮快さの見える一句。

入選

一信号待ちて梅雨傘開きけり
嬰兒を囲む人の輪風薫る

どくだみの十字花白き祈りかな
新茶飲むひとゆすりして香と色と
額の花寺の石段上りけり

夏場所の時間いっぱい四つに組む
若葉雨濡れつつ君の来しことも

二句抄

燕今日も見舞いて窓の外
青田風富士に似た山遠く見る

ゆきの下昨日の夢のつづくかに
楚楚と言ふ言葉諾ふ虎耳草

入梅や今日の一日を針仕事
その艶を疎水に映す四葩かな

若竹のような少年跳躍す
三婆の昔の話し明易し

紫陽花の色変りたり我もまた
母の日や父にも少しお福分け

揺れ光る樟の大樹の若葉かな
山頂の大師祭りや海はるか

サイダーの泡を透かして見る浜辺
青葉潮鯉の国へ寄せ来たれ

初蜜闇に帰して休める夜
柚子の花三日続きの小糖雨

どの株も三つ四つと葱坊主
眞青なる五月の空を一人占め

山気澄む鎮守の杜の湧き清水
田水張る田の面染め上ぐ夕茜

次題「当季雑詠」

締切／毎月1日

投句先 教育委員会事務局

いの町170001

0893-1922

植田 紀子	岡村 嘉夫	大川 節弥	津田 久美	片岡 包女	植田 紀子	大川 節弥	津田 久美	片岡 包女	植田 紀子
渡邊ゆかり	平野 洋子	渡邊ゆかり	平野 洋子	渡邊ゆかり	平野 洋子	渡邊ゆかり	平野 洋子	渡邊ゆかり	平野 洋子

小児科・内科・整形外科

社会医療法人 仁生会 日高クリニック

診療科目	受付	月	火	水	木	金	土	日
小児科・内科	午前	○	○	休診日	○	○	○	休診日
	午後							
整形外科	午前	--	--	休診日	--	--	○	休診
	午後							

診療時間： 9時～12時30分
14時～17時30分
(休診日：日曜・水曜・祝祭日・年末年始)

健診・各種検査
予防接種など
ご相談下さい！

細木病院グループ



日高クリニック 院長
松本 和博 (小児科・内科)
日本小児科学会 専門医

地域の皆様に安心していただける質の高い小児科・内科医療を提供します。また土曜日午前中は専門医による整形外科診療も行っています。

外来受付 ☎ 0889-24-7785
日高村 日下小学校東どなり 日高村本郷滝ノ前7

有料広告